誹風柳多留　八編

へ9
1147
8

8
へ 9
1147
8

世藩主の中序文五日舎人の印
十月六日之の名人之の中より書出と
撰弘文院の綱紀勝の名
とりの好きと謝名付たるとも
記す強也とも書附知れざれい尚
秋名の大せり宮の御柄を書て源藩
名の文庫を入してやッと

吐

都旭門葉蘭寄江丈鳳袁
柳十水生樂峨也考
百衡
亀峯
千哥
和竹
春朝
丑鳥
万瓢
花鳥
深水
青江
祇風
茂川
紫夕
在豆

粟哥亀布似玉三牛
穂川甲遊竹伯技町
捌水村竹
川瞿竹賀
芦舟
狐笠
赤雪
亀幢
紅奔
千雀
嵐巴
丑秀
井陵
雷子
鉄炮
名木
巴
連枝
緑

雛のおもしろさもこれ時さかり
ちとせ〳〵の世のながりをんなとの世界
後人小松と小児もものゆかしい
おやいろの為りかたして渡る形り
のついでん表こういのかやぶ見へ
世界の云伝いはいはなぞうり
雲紅葉世界いはへさとうり
神でこそてくるとやりてうる面さうり
九代目小坂ちぶ出てどれさし

おしえの言ひもくれかきさうさかり
それとも無い雑場をのそくく
ちゆもだくのうのうくはのもかり
猿白一美ちこをかいこだかり
大小で配りてけるくかりこちち
如去てはちちかはちはは出する
無あやは新とはかりかりは
姫の事ちしかぶりいてすの
奥さ面のおくちいはのはちち

昭和四十九年

なの通りぶとちうこい浪を見せ
山ノリシ百里屋敷ぶてても泥ぶ仕
掛ケられぬ浪い雲をまあ如
嘆いて見ぬ間ぞ世界とうんでぞり
海く事ぶ有くぬでむするけたぐり
そう紙とそ白の赤いつぶよ
おふくろと対くでのるでいきんを
逢わされそそして、手ちるめい嘆
紙とするぶ見て居ちゃちうまる

四四月とと拝手かく祝ぶのちまと
のそのかそとい浪苔で云ひちぶも
面あをかけとし前とうれて見る
我すいと男のあをかけぬ手海
ねのちてハおきると言ふよ泊ぬと
上ちそが出泊と師匠ちうく
寅ル祝もかしと金ちゃをぶ泊ふする
絵がうのそるい小袖であとがくも
ぶや金のいるぶでなとたいて中上

かんまくとおそるべきて居るいろ
かん病ふもの会の有るまゝが出来
ずいせいの絵書ハ色のくるおも
無者の世話ふのうこ活いとつき
袴をそなへまゝ先り居るりふ事筋
ひ〳〵さ化の幕とのそまで今原に
余のうこやくいつぬとすかる漁やいひ
世間ちゝ花のかゝるとまひ〳〵えうき
いりちゞのつゞの丁のとお田とり

ものだ事菊ろの出来のうさ
見物とゞ出し〳〵かゝもきるか　きやく
仕合ハ始ぶしと石屋　第紙つぶに
始のるとゞだまるゝけハどんで紙
始ハさし武士ハ絵のもし始さ
ゞいてるゝ二位どのろ云ゞ
結ぶ仮も沢山一つの祖師とり
始ゞ知れて盗人百ゝ山
不川でいれ切ろのゝ事云の

慶安の頃の一人麻ハ代ものの
小咒ハ毛や場やうとおもひ高
を寿しハ下世だくたいの事を
もかぞや毛すせんいうんと申所ハ
世間ハ毛んるりとけそのやなを
二うハいかゝ毛やさんを世をすび
雑毛ハ見かゝ毛ハ姉さ毎の
形ハ毛のめしあと秋葉へ上り毛ゐ
藤かつ里ハ東川かゝいうんきんと

よめ面いとなりゝ業を馬を書
その口て切しと売毛ゝ出ハ
結ハ後ゆゝ毛ゐるハ川ハ数がなし
七月ハ日海り春毛ハとゝ里
かゝ毛屋を筆ハ人よつき合ず
りゝハれハ死ハ人なしらと板とハ
海里ゐゝうゝハ川ぐと角田川
かんふゝゝハとゝ毛ハふけゐゝ
だかれでも世と絵の師屁をゝぶり

昭和四十年

はていまが死で逝るうやめか如
きゃで中ふおりい行ぞくあいうぐを
がぬんーてゆ中形を見る地紙を
元日ハ海ぐさあるいうーぐで時ず
えんのと知ーもう後ハ海れよるり
出ぬきでハおかいるとも出ばぼ
ほくそくでおーの張者が一人きれ
結版ぐさんごハおいまんし見く
ちりどのくたしともんぐをめいも
ふぬーまーふ仏かーふりかるい沢
ふとふ仏ーい前ーじすおも
あいーふーふ仏せを毒元ーうる
いや時ーぐいやーしやきハいやきと
はりまぬやふーふ光新とうる
桜ざらーハ下ぬのするいるの面
えんーのふんーんかぐりものと賣
者のそのさんうくふ出るをんま
ちゃんちらが家とみーずと張て新

[illegible]音相ハかゆいとり
石所のもんゝ[illegible]さとるまハのゝ
そゝいりふつゝゆゝかゝりまゝて
根ぞろへゝ[illegible]て鬚絵ハさゞ[illegible]
帆ぞゝゝとそ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
[illegible]ゝて[illegible]
引ヶ四ゝ[illegible]
[illegible]
[illegible]
さかゝ[illegible]
色の[illegible]
小[illegible]
[illegible]
馬場[illegible]
料理人[illegible]
[illegible]
[illegible]
唐の[illegible]

ふくうんと拍子をとり礼をし
ひのすが山なんとうんとうおうむこ
ぶ川へとちこさは色てはつまる
ぶ稲ぐんてもちかしはせゆく発とひ
ちうこをかいこうけいがうんぐこ
こんりふちら西ちんこてやこじゃ
夏初とちぶようてあ　こうまは
くどうまてあるもけいちの初てこる
ぶれめてもこんぶこ義りの口こうり
ひうこうこの四ぶこうこかれ死郎
世こあくてこ山こ豆ぶこ河こる
こうやかこぶこぶこぶこぶてここ
りこの西こちけ解ぶこうこ
ぶんぐ湯と後部ぶくい郎こ西
出嘉いあが洗ちぐこ初郎で
初こ人こ後ぶ人ぶ逆人こ
ぶいこの意ひこ海ぶこ
沼こちこてひこるひと

行くかゝる上のぼく〳〵荷車はいそ
子とならしもさるゝ事も里の口
出居が留守ぞとえめぞろひく
手ゆせんにだん院の気ハかしこまる
前も里にゐる通らハ思しと見せ
ほのあふ蔀とかくよりて合をすて
うるしの幕て内錺さえすゝき
錺屋に小判ハ風の神
現ぶるあくるの紙しかさと出し
御川ハやらふくむすまゝてぞ
出る袖ハ近くへらんさる袮に雲
指ゝ袖のそのにもんめ扇をつけ
かし中屋古篇にうすもおて居れ
生絆のうしろ遊じ器かて
だん院ハ毛ぬきでおへうてゝふ
もちりゝのるすで日蓮行乞見
大門の内ハたいあのくあにちる
山さんとつゝ六にのふ川初合取り

和田家文書

私の酒ゝ仏とうこめて了度うけ
酒ゝ〻酒の肴ゝ〻さんでお酌ゆの盛
ゝ〻のせるとつゝしゝとげむと
生辞ゝといゝゝ小ぜゝ〻ハうて酒ゝ
酒ゝの日宮さひとうかゝへるく
奥家老ぐちかゝ御とうりく
酒ゝ新造ゝゝゝゝさんゝゝぜゝひ
家とする時ゝゝゝゝきるぐゝんかゝ引
年ゝゝゝ造酒で暮ゝゝでゝゝきる
ゝゝゝゝゝゝゝゝやくゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
かゝゝゝゝゝゝゝゝまげ文通でいちを合
朝ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
さゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
酒ゝ酒のせるの一ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
私の盃ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

二人ハ日を女房の傘をかりてきた
大名と町人是の出合なり
かハいさうだいしうとに一界孔見を
かゞみ流だらう二タ瀬川どハあるとうを
うけおちやのいばハ早取識としてば
茶屋の間へやつて来て居る猫の妻
やかがせる知つてもむすめよつてきる
絶へてゐるといえいふ人をなつかしまる
流たまさに打ちくらべ酔ふて居ぬ
すかさずとつてもしてよいとあつきばき
幽霊殿でもしめて入れとおえやらつき
主人への店ちんほどハ関に居ば
とくゐのむすめ婿入とゑつさ
さすがし風呂屋ハ居ル内の紛家する
りしもおしつりと語とる瑞の名
基の助まこしひさく取りと座へさち
毛がつらくその分く和尚くとおとむ
中条ぐ下女悪縁のあもいし

馬追にかけんとおもへらはせめぐらかり
ちゝ高のふ気ハ物にさき武す
ふ亭知るやせ々ゆくまんべくらをせる
だけ追に根でまうとめ幸延り
とらしきんかするると婦に立ぞり紛
屋んべらとひあんけりしくはぞうたぎ
因後とうじく　驚と志んけての夢
坂塔の一ゐ戸漱の海ぐ二度たおも
淡むすめ嫁んへのひ表ぎつてくは△
襖れしあかりめてゐ見くらし申
そん安のかんべしとする清へとゞ
ぼし縁の主事つきし申二りくは
稼もの下向東海陀と申候
記るづるハ手数所するつきての名
きんだそうかぞくら紙の人てこ
白むくとぞんらけぬいで敷や入
稀もちはもぬるとりて志かまき
そのてんのワらまくのまゝとぬぎかえて

柳ばし出てうちぐいしとや里
紛るゝ竹にすゞめのふくら人
又鸚鵡も出スハとくおまけも直下
りふたり川上ゟるとれうにに笑ふ世
ちんつう也しとし酒くくミます
隅田さへしかしふさて居る鳥前着
あいもせぬ記者くをふきふ利刀磁
演風に藤田の名吹おもし
写筆の事し自らくふい大ふ出身
うしとがいふれてとて以ちゑ出ちぎ去
おそり子がすおておのしやう浴しさ
此うこのかるれハ忠の人がち里
狼がせるいおしらし影ニ瓦て
唯物見の下でおぜ又いとあら
済しくきすりふ記般もすへる泥
数石を濁さん上やすと弟んろ子さし
三味せんの師匠ハ行田てみえく本
笑ワけてあんぢうたいさ二回のべ

獨楽

ゆきてゆくとこゝろんとゞ出ぞへ出ぞへ行くゝ
海し湯のさびる九日十二日
田の面のもるゝ雪をあつてゝろたゞで備
出さうん高橋の方でハ四ゞんもゞ
ゆくゝだ山あはかゝのゆきあり
落田ゞ源ゆ屋〳〵赤〳〵さかゝえ
ゆ楠の紅やうゝしとうあつる
玄六郎ハおむゝちゝ出ろ人が嫁
やゝの美入ルはと時て結くかゝす

よだ道ても二タ計三ゝりぬけてゝち
一下森入ゝゝゝも除のゝひ戸
お嫁ゝゝりゝゝゝゝゝゝ大縄ゝ
ゝゝゝゝゝ郡ゞん出ゞ鋼の高
道番中ゝ〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵
かゝ光小付あとかゝてあゝてる
ゞゝ尼ゞゝ高ゝゝゝゝの中小絵
ゝゝゝて郡車ゝゝゝゝゝゝゝゝ
絵ゞ下二を目ひてゝかゝゝる

梅

あ一えい鶴ぐつをいてのちまもなくび
うしかりとのだの主もせぬおもてを居
よりあいてもぐらとさいうぐこそある
新田さんあふかんこんこんこんこん白と
ちちちちちる家とお田舎のいかが嵯
お代目いえやうてれ代めかりだこへ
くこれたりこやんが見つあるを里郷
えぐれまひぐしし掘あぐこへうあを
なる世節ぶりさをひくこを

湖水をしてもめんふ拾って出た
綱ぐるいたぐるうんくと出たさん
むの枝はいとうの時の毒酒をあう
下ぜさしすあされて居る姫の風
殺人の志けをしらさるむぐいる
ゆえを見ふ石人一面御高あかり
ゆめ一道こ嫁てんきんの方へ向
思を中を雪ふしてれ居酒のを
出一門ぐいふうんふたくらを

獨 梅

きりかぶてんかくこいをくそぎ
ものあのおもてあ門がおてゐる
にわんと屋ゐはるわて清出さん
きう着でもひしと幕の和ちぎ
柏野母ゐりきのあてりてのあ
ひきのをいい和ど出屋ゐるく
だつのもしきゐ屋むごい祥がつき
二つこいはあて解むるゐてし
子の日ひしぶ通きく切りりくさ

きりかくおきつきと言の方うと懐
十あへ表沢きりてんきち
はるん合ゐりり日おなればいきる
あ純をむこくきいもム表見概さん
いぢ流きの表イ形おるほきちゆ
よ下をだつちのくむひおいる
下筋をむするゐ柏度ゐ盗出し
きのこぎんでいと繋結あるゐき
おもきくき表と行屋ゐんゐり

以四條ハ[illegible]おかり[illegible]をとりける
[illegible]れの[illegible]何ぞ[illegible]てもよおせく
園しの下せうん[illegible]ぞ[illegible]ぬきり
元日の[illegible]いく[illegible]ほめ[illegible]ほ
[illegible]ほ[illegible]ぬ[illegible]
[illegible]ほ[illegible]湯[illegible]で[illegible]池[illegible]
[illegible]ふ[illegible]荒神[illegible]を[illegible]
[illegible]ぬ[illegible]こで[illegible]ぬ[illegible]
[illegible]舎り[illegible]毒[illegible]

[illegible]ぬ[illegible]とをり[illegible]
[illegible]のを[illegible]ぬ[illegible]
[illegible]の[illegible]ぬ[illegible]て先[illegible]
[illegible]ぬ[illegible]ぬ[illegible]
[illegible]ぬ[illegible]ぬ[illegible]ぬ[illegible]
[illegible]ぬ[illegible]ぬ[illegible]ぬ[illegible]
[illegible]ぬ[illegible]ぬ[illegible]ぬ[illegible]
[illegible]ぬ[illegible]ぬ[illegible]ぬ[illegible]
[illegible]ぬ[illegible]ぬ[illegible]ぬ[illegible]
[illegible]ぬ[illegible]ぬ[illegible]ぬ[illegible]
[illegible]ぬ[illegible]ぬ[illegible]ぬ[illegible]
[illegible]ぬ[illegible]ぬ[illegible]ぬ[illegible]

恵小袖壱とおくするまゝのく
切見世のくぜつきんかハおしせうけ
おくり子のしくりかつらのかたてまくま
かつら風ハ深くえいかく見へてもちさ
紀の郎がハ壹ほどの奥都嘉
かつさりしも八角切の揃髪に
様元て揃浦へ通しまれしき伝
川とめかもかえと吉次浪月記
白里趣てぬれて浸都の君か部

上ミ流れてまるまるかれにハ源三位
首つきうし切つてハはゐる料理人
かれちくも味やよとおせへはやくそく
ひかるとちらしへかゝる気しさ
かいそし小先っちえくらの流れときさ
樂つくハまめしおやちさとさし
物めかのうびか風のしかけ餝る
おも徳の名前しか出るおりしろき
めしぬれとかつて円縁つゝしき

雪月花

ゐんかして高ひとをするあつて花
かづらとぐ地紙の扇へ文をうつし
流を見ゐたてハあすハとをりるとし
さのさ毎のよめで形造おゐ事
為ゐなをんすとハおびゝ世ひやう
毒薬ハ大事の こゝやくをもて毒
中毒ぐ中のかゝごのまへと知し
ずゐと為てだゝずゐて紙書の門
出房の郷でハ池ゐとも上ケ

書毒ハめつかりあゐ毒ハ毒へ
家物のすゝをれをとてゐとゐのやし
そのかゝぶハ云イかゝゐて屋やうゐ
ゐんゐんざ傷ゐ下ハのんで、そとする
ゐ下ゐで馬くそうゐ毒をゐ
をくでゐひおりかゐをとゐをとる
山まりすゐ毒ハ世ハ下り坂
門すゐ毒ハ世ハ下り坂
江戸の酒ん中ゐてゐうまるゐ

養子四郎左衛門尉がげでし
ゆきてしまひ梅てお毒ゆきそる
はしはしるふてい毒がつうだ
四郎はお茶ゆがわよがはしせり
扇子おくゆきいとそくゆきぜん
紅葉見とゆかやうまるちづき
ちゆうきばはしきはは用毒
毒のしふものかをひくえぜんき
ゆくしはぶしあをとくのこせ
長光しゆちゆの門が出ゆくいよ
おくりまの女人口りかきば
くおの子とはきすてふして恨おくを
光はしーうさづいてらはけ
大ーきおきぶくいする大からん
村中小紅かくんでおくゆる
ゆぶくを扇ふして被伏引
ゆの梅子ふかはさぬも
玄関義お毛ぶくきめてち

鄙のけだものにはあらぬ
おとりあつまりもいくらも網を張りたるや
ごとくしたりしの通る音
めぜの鮮なるかぶとをさいはうちの
廊下に着ずるふりけてはかちうく
沼水かりそんふるりまるて世が越
海ぶ張がおもかりよと嫁おりて
そだいでえんもてんやい汁ずくな
くしいうを下世宮ばりくしかくさ
きの藤八郎とぶのるさうけてり
さ一貫のおいあんぶのがたこしうて
くいうけてとぶ汁をかいなうて
安うの事しなんをうのく
大一えるけけしの夫世をうれる
言かうなどが事よせるがり
張づも言しは石動うりたのす
海いうかんやが店も見ては居ば
沼市のぼせたどおのせとうかやし

柳だ〳〵川〳〵やうんとはうをあ
きなかの枝ゑ金の石具をり
ゑ川の矢先ゆ
ゑいさ拾ゑ年をのとひおくする
師匠いゑもおしごさゑのとの
ゑ〳〵ゑと之〳〵拾ゑはゆ〳〵きす
奥新発うんゑ姫の元でゑかり
蕎麦のぐんで取て和ゑ
ゑおつい〳〵四拾の拾〳〵雑とゑん

めんどかゑ〳〵ゑ拾ゑ姫の拾
ゑとゑとゑとでつかく〳〵ゑと姑ゑ
毎年の下百姓をおっしがり
入用とゑう拾だ大工ゑん切うず
ゑ下帝ゑ茶屋の四拾ゑ石かゑる
之味の若ゑき〳〵ゑ〳〵てゑちつゑ
うゑはゑでかっ〳〵ゑ刺ゑ紙ゑ
石やゑ〳〵荒ゑゑとゑる神常堂
庶ゑゑを拾ゑ〳〵見ゑゑる拾〳〵ゑ

ざんぶりと水にはいって、ちょっと冷えた
おつゆをすこしたべて、酒と肴とに
てんぐ小屋をかくしてある舟の
吸物と魚をかくしてあるの海のやり
きぎんぶくろ海ぶどう海ぶどうを
てってをだばのしっぽを海ぶ
ぶしりくんかたちはいれん
おいのうけてきたるやすいかうを
今年の美をとりてあるる松ばや

宿やりはどうの兄さがようんざやう
戸ばりおや町筋をうんで見る
美人ゑで安治合の波郎をそて
四郎兵衛おばさんおばさんが
戸棚ってふくで第二は勇
上下で浜ちゃとしゃ坊主のは
その町くまるるかけ声ってる
鬼ヶ代のよんは十郎が合るる
此殿中ひのくぶく論初しけ

引張りしゝ陽の如きもの の山
二十四五人ふしすめむざいの事
意地悪婦橋ざめおるかゝるは
若男姿八ゝ丸しつゞき大仕事
ゝゝといふ事解かゝやすとちんを絶
強者を所のくびとりせるきつい婦
若男姿宮むさかりてもちぶゝし
嘆きのふかけてい孤ふひづゝしい
若ゝ人りゆとて義物ゝうりけ

けりゝものゝしひする同ゝちんゝする
面やぐゝ姫色でかゝぐゝこゝめく
遠ゝ晩忘ゝ忘ゝ迄初舎ゝ人
詠川若ゝとゝけてのせんざ者
若神ゝ姫ゝんで泊ゝて男ゝ忘る
ぐゝいぐんのつゝき世界ゝやめが海
せんぐゝのと泊ぐ絵ゝて忘ゝ若男世
若京のゲゝふぐんゝかんゝえゝとゝと
おゝ（方ゝ方ゝ婦ゝぐゝ泊ゝぐゝ

世ちのうれくも義理の義に　亡夜話
時ちゃんかしくに紫のそだて主家の
主家ちくに初てい拾置りそうそうれる
人こいを夜でふそぐ　かくい事
ナッざーを光おそうしく出してくるる
すくふさん主家かに有しく茶のるこ
主家とくくふかくくに様を保
ぐやくくに初る茶かに有て主張する
世ちに経ちかちて小夜ぐぐせば

柳指切ちはぐくめり石ちの主
人がくてかくめくくする茶屋の後
ちいさくさくに敷磨見くくる伝説の
ちくくに方かくぐくてかくくり
ちに時のはくくくくくはい　拾ち全
ちのかくちの主ちくくに移ち有しに用こ
田ぐんくして毋すくんかくれ
日和下駄暴の有にはしいくく　海
町内を礼ぐんかくて掘はか有

梅

ちくぜんにて二十里上へ下ゆかへて
ちんらうれらくとなすとるゆうこと
その意ごとくなる感をもつたること
上下の世なうとさすする　礼の体
のごとく卑劣なる屋つくりをこぶしく
出されたと思ふ　ものすごき星の如
日中へ出る角ふねと出してあり
大海の沖といへども波しづかなり
しかへ紅葉とおぼしつひし風

海ん中を海掃部と二りんおりしあ
そこへついてさやよのおハ年おは
面白き大こうるのちんく
ゆいそこのよいをほまられこと
世房を絶づかして番紙つけ
行程四人ばかりつらひこと屋とこく
大せうこちたてかく海毒気がかり
郎人こんこ夜ゆ夜ゆ拾る紙
お侯が出馬　紅葉ふ人ゆけ

他人がうんじゃが仏父のふくまく
はくすこさんしこさいを作く
その無ぶぞくしするのぶこと失のこと
ぞうくしむする基あのき鞠かあき
むしてふ拭織のふるえんのこさ
義人のふっぱるこは泡が泡が
問ふ居っるやしするめっふんとるや
ひの後毒乃孫教でふけさい初てのの
お節とうし為人色はあが為る

おくろのはと初んそぐやうり泡き
中性をあのくはるぬるき泡すしいと
新家ゲ居ゆくもげのとのせる所
初の雑仏無泡ゆんさされこと
よおさばかるけくを系の泡無て
面倉そくまくくうまんは
毛ぬは潜ゆ泡はは思金くけ事
おまくぬくてくくくのきぎん
人間くかくばぬ見の仲る毛

光秀と家康人細工有あらいく
茶かをあるあるおるやしばらくの計をな
ふ所ふ男ふ市をしばらくうり
切しをそくこれをかをと書
結むすめ有るかを薬がをしく
杉しるうしをくをやる筋さし
物干で姓もを解見をしく
出を合をくちんを家を家見物
ゆふく店をいをを細おをふ物り

りををを節をくを過を貴をを
筆をくを物くをでをを入をおくを
ゆを商ををくをり祝めをを計をし
ふををををを料理人
村姓節をんをを海年のんを居を
美見見をを岩をんをたいこをを
九りをくを岩海をを海をををせる
月をを二をを月をををををの
節をのをを四かをくをををを

海ゞ出家ゆ新〳〵ものゝ蔵茶ら
いつゞりでも結ゞゞ拾めたゞまんの
りゝ入してゝ乳母ハ湯でゝどき
湯ゝ書ゝてんぢゝ月日〇と物
明代ハ池ゝ〳〵さと大一方
海苔を刈正すハ的智ゝり
ちんぢゝして絵ゝおやゝぢ三つ三つ
あいぢゝ竹かゝて持のかゝをゝき
四日めハのゝ〳〵ゝるかんぢ屋

旅の道中図

おゝりゝるとハ味噌とゝし四の者一世
ちゝつゝまゝて弁出ゝと物ゝ湯ぢゝ
指を合すゝるゝハゝるゝ
物ゝ〳〵母て物ゝ〳〵ま出る
言かゝゝぢゝ言ゝとゝゝゝ
いま日いゝいて居ゝ物ゝ居
ゝゝゝゝるのが年月ゝゝのゝき
野りゝのお物ゝ母ハゝゝ

初瀬かハらぞりかゝ畫くふち海もち
夏の間ふるさとかゝりてこゝぞ是
御陽觀のくづ屋の御樓おり
茶屋の亟とする間あひかくさ
ゆるぐしかせるのをとるゆざ沈
ゆすいりくゝゆるしぜたるつき
夢人屋のかゝ大神とたゝ大のの大
玉神楽海とゆるくゝゆくさん
生酔の沈るさのゆさしれる酔りかゝ海る

えんぐくゝかゝ海面をゆそめて見えゝ
ぞのかしてくるくゝゆるくゝぞりて
ゆ中やくゝゆくゝつる屋くさくゝ
川を紅スゆ玉ますつて海くゝ
るゆ大松の下ゆくゝぞりて
四合始くゝぞと見えてゆくゝ
ゆゆりの濱紅ゆゆゆぎり
数入ゆえゝ玉くゝゆゆゆゆ
ゆ川ハ山のゆゆりさん海ゆる

辻番ハ乳母をたのみて下女をする
掛雑（注）毋をたのみてるこ
十六日おもてへ出るくるま
ちんのゞ者分ちかく宮で
所用ゞ分のいつのいつが仕出ス
即まつをの縁のそばで郎女
先遣ハちめてちらしまいる
郎じまつをつすする者ハ
おしてそうふ兎と出ちる者

物ちびけちものハおやちのそち家人
四谷ちのつ家英四ちり会
相撲やひのつ〻ふ〻ちいれ出シ
ち不ハ番ちりかけそ
物ちちかの出ぬ
ぶやつ人ふかち所紋ち
ちそ転百歳一ちおちつ人ぎ
ち坂のちちちけかおち人
はかけおかつけて思ちのはの

てぐちいはぐのとうり初こ女
山寺と芝で公家衆へ　中　五六
やはまてら女房の母るたいかも
目のすぐ山ぐ車りけて居
ものひろふくらもんてけすも物
仲家ハ格ちぶひしこうぬ帯
代縁ハ美とで母ら男物
神を呼ぶ事今ぶうと新小説
えらやぐしくふとを出ぶく腹さ

ものの門豊房ゆ門も家が折レば
ずれ〳〵と仕方ぶ〳〵とひすると
格子毎のた音ずする雪ぶ川
小丈とどてくとすかくて出
ちとりで逢しで嫁とやすくすぬ
ひ姫ちぐ母ちつくしいぶぐ辞
親ちと母力ちくしひぬる
十四日記ぶてけとと房車
かいふんとるのでぶゆりくせき

工面する四は男のはいとき
えはいしい話半町かぐらい
地面さぎんら見ふるしひさ城跡
就ぐるをぶらぶけて後ぐとそれ
ひしのすくみそのすかとおぐやき
繁のきこの面をりてけやや
十下の海てしけれるぼんの
通町おくこ店かくるそこ右
抜くをいしの繁屋
ぬちや〳〵て月下の門の一番出
そくくれのの番くえだくく藤く
酢ぶくそくくるんせり色と四武起
抜くをと通いくきくこかんぶかり
通りの番で色りぬけぶ知し
市海就石寄くく就小かくを
くく礼と思くく初鐘立ぶる
完一と就くくく就小深
ワくくてのくくハたいこのくくいく

おがら黄うらぶかきくもつかけて物
大三十日 あるくまへうらと横ちを
時とあしの赤はおぶは 敷けり
雑ぐつをきんの赤ぐつて 輝けり
拾和金賞いねひするくひおいは幸
ぐりと痛くやきんきとひおいやつ
かくかをとせんでいは出しくを海
仮倍もすうが九つかくぬ
あげ風くの時でくきる 幸おとお

雑ぐつをおくかの事かくもどうづの色
ずいぶんくと測験でいひ
奥中ぐお接で接又りてかの
一小云かりて鳴るかりを出
かくかのどのちんとおぶくを
おくがんやくおぶいはかち
ちきんくちくちくする仮見合
あるやうの仮衣ていあぶすを
物ぐしのうり出てかくくとり

雪松

問屋は長屋〳〵にゐる者
ばかりなるも紙と一おかさびるく
はいとゝ〳〵とゝ〳〵ぶてやはつの通り
やまでゐたくこゝとゝこゝ四合ゝ
奥の紙九メてだやしばかり〳〵す猫
馬を男紙でうしけ出はからゐ狗
いひぬ年でゐざるとゝこゝ〳〵
さしを拾ひ中ゐ〳〵つく狗とやる
ゐ内ちらも武士つゝ合〳〵紙ゝ

ゐとうゐ家とえんでゝ茶屋でひ
又伯母ゝゝ言士ゝ長のる猫の毒
勝ゐ〳〵言士ゝ長ゐ　そばかぐるゝ
武士ゐと出部〳〵ゝゝゝゝゝひ
お猫をゝゐ　あ〳〵の江を狗
蛤ゐ〳〵ゐ小猫とゐれて　くゐ
やゝてゝかゐ狗のやゝゐ碎て茶
裏門ゐ見ゐる一日でゐん元し
ゐゝゝ猫ハ蛤ゐ〳〵の猫ゝく

いけかゝハおやゝいでゝ山門を出る
世界の国のいそがしい下世話を
数入ふしてゝる芝居の見物さん
がそこらさゝ小舞でなってる猿芝居
下世がせるゆびと二つふ割っさやう
シテワキで演英の通ち ひの山
そゝぐうふて見ぐん氏と呼ぶを
そゝる扮もりひ法するみかと川
くゝゝゝゝ下法で汚合 礼のまま

逃げ逃げ逃げ出でて行茶とそびび
順をゝく死ぬのと始くやしかい
ゝ行をゝうふ見まこのいふけ抹
紙ゑかい御の書紙 師でとうん
屋ん屋ゝ屋ゝ板ゝ板ゝきゝやゝしゝ
屋ゝゝゝ屋ゝ紙を 出し
やゝれゝゝあんぼゝとそて風呂
下世ハ又世ゝつゝやゝんさゝるゝる
扮ゝ全ゝぐゝゝゝかゝりがあ

[illegible]くの生徒、[illegible]
[illegible]とかしひるとあるまうへつけ[illegible]
[illegible]ちよい所をどんどんかこの時
阿[illegible]と紙[illegible]四ふたてやらは
[illegible]れたりと是をあしらう
前田とこうして[illegible]
十七歳　男中の内い[illegible]
[illegible]へつきそのと如[illegible]
[illegible]びの田藤い[illegible]の時[illegible]

[illegible]計四時[illegible]
おまへうまくとんで海[illegible]
うぢつくと仲人[illegible]
[illegible]
かへる時[illegible]この出る大いし
江の橋の十里[illegible]ふ二月[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]の校[illegible]

[illegible]町を業ぶ[illegible]ぐらでありかさき
一すぢくしは都[illegible]のんでさし
[illegible]の合奏の[illegible]こと[illegible]
[illegible]ぐらいやたり[illegible]
[illegible]ぬ[illegible]ひ[illegible]
二日[illegible]くせ[illegible]
[illegible]九[illegible]合奏一[illegible]
首二つ指を[illegible]
[illegible]いかり[illegible]

[illegible]ども[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

雛の祭は四月八日なれども元がのより
ちいさを村中さんれおりて
鶴が丘の男女の新れなる人を
ゆるがしるるもし祝ふかすとくは
面やどりおゆの方がいろ藤
紙ひすれたんしし来てゐる
ひするほうぶしひかりふかりてる
ひとびんの呉服ものがひ来
ひとりの国の如きふ

ひとびとうとう京ち流り二つ出
幕の為に出えうせんと出
ひとりの中ふひ芋屋つのがわり
廻仮もひ人りて居らやかぶえき
はたらうを拾へつけき奥赤花
くやしひおうせぎるお茶や
小屋んとすまいてちらせんひ
ゐべおうけ芋ちらてしてをを流ひ
屋ひつのうが四奥ちるかこがせる

言ふ迄とうけるとやうきげんうるはしく
茶をとりてくんだ者もがみ人
目ふ五ィ面おれ九月下ふ日を出し
ゑぶうるうてはうやたうかいに嶋び
師匠をくずしくと二度んもび
もよりいはがつやさまふ風るもおし
一生の出房とひするに味すが
十七で嫁ゐ夜更を移ひと
安永二癸巳林鐘吉辰